

公開シンポジウム「宗教と倫理」

宗教と科学と倫理

浄原法蔵

(岡山理科大学工学部)

1. はじめに

昨年7月のある講演の後、京都女子大学の徳永道雄先生から「宗教倫理学会が設立されるので、その設立総会のパネルディスカッションに参加するように」との要請があり、その趣旨が分からないままにお引き受けしました。分からない第一の理由は本学会の名称から推察される設立趣旨でありました。「宗教倫理学会」とは、宗教における倫理を取り扱う学会なのか？それとも宗教と倫理を並立的に考察する学会なのか？何故に宗教者が倫理を論じる学会を設立しなければならないのか？でありました。第二の理由は、何故に自分が招かれるのか？自分も浄土真宗本願寺派の住職ではあるが、科学者として招かれたとすれば、何故に科学者がこの学会に関係するのか？が理解できなかった訳であります。今、理解できることは科学が宗教と倫理に深く係わってきたし、特に現および未来人間社会において科学の在り方を抜きにして宗教も倫理も考察できないことである。

倫理、すなわち社会的人道規範はその環境の伝統文化・思想・政治体制によって変化する特質を内在している。それには環境発生的に形成されるものと人為的に作成されるものがある。今、ここで問われるのはこれまで継承されてきた倫理観の変化・崩壊である。環境によって変わることはない人間共通の絶対的倫理はあり得るのであるか？その絶対的人道規範は宗教の中に見いだせるであろうか？そのためには宗教自身が「宗教とは何か？」を問い続ける必要がある。宗教自身いささかも変化しないものであるか？自己完結的固定化概念となっていないであろうか？

近代および現代社会の全ては「科学と技術」に支配されてきたし、ますます依存して行く。科学と技術は社会の固定概念を打破することを宿命とする。科学は固定化した倫理を

破壊するところに進展をみるのである。それは宗教をも変革する。倫理と宗教に変化を与えない科学はあり得ないのである。

科学と技術の人間の精神文化（宗教）への影響とその外的表現である倫理規範への影響を考察するためには、科学という学問分野の理解を深めることが極めて重要と考える。

2．科学の特質

1）“科学”

日本語の“科学”という語彙は、中国南宋陳亮が「科挙之学」の略語として科学という語彙が使用されたことに始まると言われる。すなわち「科学」の本来の意味は「科目別に試験して人材を挙げる（科挙）ための学問分野」の意味であり、「個別学問分野」を指した。明治初期、福澤諭吉もそのような意味で科学を使用し、「文学科学」という言葉さえ使われている。明治の文明開化時期に西欧からの自然科学をドイツから取り入れることに重点をおいた。その成果もあって、科学の語彙が現在使われている近代自然科学を指すようになった。

2）“Science”

古代ローマ使われたラテン語 *scientia* に由来し、「知識」を意味する。中世ヨーロッパでは *scientia naturalis* は「自然に関する知識」の意味で「自然哲学」と同じ意味であった。その言葉が現代のサイエンスの意味をもつようになったのは17世紀になってである。

3）近代精密自然科学“サイエンス”

古代ギリシャで神話的思考からの決別し、徹底して納得できる根拠を求める思考から論証（証明）思考法が生まれた。これが科学の源流でありヨーロッパの合理主義の源流と言える。その古代ギリシャ科学には理論数学、自然学と医学が含まれ、天文学や機械学が論理的に展開されていった。ギリシャ科学に始まる古代科学はアリストテレス的学問体系がキリスト教的に解釈しなおされて、キリスト教的アリストテレス主義の学問体系が成立した。そのために真の論証的科学は17世紀の中世にいたるまで約一千年間にわたって大きな進展はなく“科学の暗黒時代”と言える。その科学暗黒時代に夜明けが生まれたのはルネサンス以降展開された科学革命による近世科学であり、次いでフランス革命後に科学に大転換が起きた。これが現代科学を導いたと言われる。

古代ギリシャのプトレマイオスが集大成した“地球中心的な数学的天文学”（『アルマゲ

スト』)”がコペルニクスによる“太陽中心的な体系(『天球回転論』)”への転換が開始され、ニュートン『自然哲学の数学的諸原理(プリンキピア)』によって完成をみた。これが科学史上の一大事件である。この時期にケプラー、ガリレオ、デカルトなどにより自然の機械論的モデルの採用と数学的自然記述の重視が基礎となった科学が成立された。それは数学と古典力学が中心であった。

生物も機械論モデルによって見られるようになり、化学も錬金術的伝統から離れてボイルらによって機械論的・粒子哲学的形態に書きかえられていった。

このような数学的、機械論的、実験的科学は近代科学の概念となり、それより派生した科学的合理主義は一般思想、一般社会への普及の思想運動も起き現代西欧思想の基礎となっている。バイオテクノロジーの基礎となる分子生物学も生物の機械論化によって生まれた学問である。

4) 技術

元来、科学と技術は必ずしも同一線上のもととは言えない。自然摂理の哲学とは無関係に人間生活手段として技術は生まれ文明として展開していった。ルネサンスの科学革命以来、18世紀まで技術が科学の形成に貢献したテクノロジー科学であった。19世紀の半ばには反対に実験科学はテクノロジーとして実現される「科学に基づいた技術」すなわち「科学的テクノロジー」となった。産業に役立つ科学「産業化科学」とも呼ばれるようになり、純粋学問の「アカデミズム科学」と対照される概念である。現代においては科学と技術は切れない関係となっている。

現在、科学のあり方が問題視されているが、その対象となるべきものは科学ではなく実際は技術である。社会と深く係わり直接影響を及ぼすのは技術であり科学ではない。技術の社会的機能についていろいろな考えがある。一般的には「技術は目的を遂げるための手段にすぎない」という「技術道具説」が主流であるが、「技術自体が実質的な目的内在的な存在、独立した存在である」という「技術実体説」をハイデガーは唱えている。

科学者と技術者は道具説を採り責任からの回避の姿勢を常にとる。実体説では、技術そのものがものごとの中枢部分にかかわる骨格的思想であり、イデオロギーであるとする。もはや技術は科学を栄養として巨大に成長し、純粋科学から独立して一人歩きをする化け物となったと言える。その結果、経済的、政治的あるは軍事的目的を果たす行動をとる。また、その技術が技術として利用されなくても技術の存在自体が力となる。

3. “宗教と倫理”と“科学と技術”

社会的規範である倫理には外発的倫理と内発的倫理があろう。前者は人為的倫理すなわち社会システム維持を目的とした政治的意図が強く、“システムの倫理”といえる。後者は人道的倫理で自然発生的で人間個々に生ずるものであり、その倫理観は民族的、文化的および宗教的背景を基礎とする“個の倫理”といえる。宗教教団によって設けられる統一的制約的倫理規定は宗教を背景とするが、この場合は“システムの倫理”に属するといえる。しかし、戒律があってもそれに制約されることなく、その戒律を自己の生活指針として内発的に持つ倫理は後者に属することとなる。

先進国と呼ばれる経済高度化社会において倫理および倫理観の喪失は“イデオロギーの消滅（消失）”に起因するところが大きい。イデオロギーは国家単位、民族単位あるいは個的な思想アイデンティティーであるが、民族、人種が混在した社会また多量の情報が瞬間的に伝播するような社会においてその社会システムが円滑に維持されるためにイデオロギーの画一化・均一化が起こり“個のアイデンティティー（思想）”が認められなくなってしまふ。自由社会と呼ばれる社会でありながら、実は思想的フレキシビリティはなく思想的キャパシティもなく思想的および思考的自由はない。ただ共通の唯一のイデオロギーとして“経済論理”だけが残し全てを支配する。単一のイデオロギー、単一の目的しか存在しない社会は明らかに全体主義であり、内においても外においても単一目的の達成のためには手段を選ばなくなり、個同士が互いに個の存在を認めない社会へと変貌する。そこに社会的規範が消滅し、いわゆる“何でもあり”の社会となる。

人類の共通な“知的枠組み（パラダイム）”は“通念”、“常識”あるいは“固定概念”としてその時代その時代の精神文化活動および人間活動すべてに影響を与える。古くは宗教がパラダイム形成に大きく係わり、倫理観もそのパラダイムに基づいて自然発生的に形成され保持されていた。科学と技術が大きく進展する度にパラダイムは破壊され転換されていった。古代ギリシャにおいて、ルネサンスにおいて、産業革命において科学と技術の進展が人類の知的基盤を根底から変え、生活様式だけでなく精神文化活動にも常に大きな変化を与えた。特に20世紀に入って科学の著しい進展は“宇宙と生命の仕組みと機能”を広範に且つ精密に解きほぐしていった。また、今世紀末に至って精密科学に基づいた高度技術は従来不可能と考えられていたことでさえ可能にしていった。現代の科学テクノロジーの急激な発展は天動説の地動説へのパラダイムの転換以上にパラダイムは大きく覆されているといえる。これはパラダイムの転換というよりむしろパラダイムの拡散あるいは破

壊あるいは消滅とでもいえるほどである。すなわち人類共通の知的枠組みがなくなってしまう、人間固有な精神文化活動が希薄になり軽視されつつあると危惧される。このことが宗教および倫理の崩壊に大きく係わっていることは否めない。ある意味では、科学と技術はパラダイム（宗教と倫理）を打ち崩すことなくして大きな発展はない。いわば科学と技術は既存倫理を壊すためにあると言って過言ではない。

4．次世代倫理は宗教と科学の対話から

宗教およびそれに基づく倫理観の希薄化は“イデオロギーの消失”と“科学テクノロジーの急激な発展による既存パラダイムの崩壊”によると結論付けることができよう。これまで外発的作爲的倫理は政治および経済システムの変化により意図的に変えられ作成されてきた。また、内発的自然的倫理も宗教を含む精神文化の変化に伴って変化してきた。歴史を通して見て、時代を選ばない人類共通な絶対的倫理は存在を見いだすことは極めて困難である。はっきりとした倫理が見えない現代、倫理によって制約されることを拒絶する今、例えそれが人道的あるいはヒューマニズムに溢れたものであったとしても、新たに構築した統一的画一的倫理が受け入れられ、次世代に継承されるであろうか？統一的倫理の採用は政治的、宗教的、教育的に好都合であろうが、今やそのような時代は終わりを告げている。ある意味では統一的倫理は個の存在否定すなわち全体主義化に直結して恐ろしい面を含んでいる。これからの次世代倫理とはどうあるべきか？この問題は倫理だけの範疇におさまらない問題である。

最近、“協調”とか“共生”という語彙が現代のキャッチコピーあるいはキーワードとしてさかんに用いられている。しかしそれは美しいことばであるが一つ間違えると“個の抹殺”に結びつく恐れがある。米国で起こった同時多発テロに対する報復に関する国際協調には個たる一国家のアイデンティティーなどは認められなく戦争へと全世界が収斂されていく。これは小学生の“いじめ問題”によく似ている。すなわちシステム（国際、国家内など）内では個の存在を抹殺することが倫理となるのである。これは人間と他の生物との共生あるいはエコシステムに対する概念も同様のことが言える。これからの時代は“システムの中の個のありかた”ある意味では“所属するシステムと構成要因である個との戦い”ともなろう。現代は個を尊重する時代、個の存在を主張する時代のように見えるが、実は個のアイデンティティーが失われている時代なのである。

あるべき倫理として、例えそれが教育的であっても宗教的であっても、外発的外圧的統

一的なものは受け止められないであろう。システム維持のための倫理は一時的なものであり争いと混乱を誘発する。個の内から自発する倫理、人格としての倫理、個の尊厳としての倫理がこれからの人間社会に求められるであろう。

“ 個の尊厳としての倫理 ” は “ 自然倫理 ” でもあり、“ 根本倫理 ” とでも呼ばれるものである。科学テクノロジーの急激な進歩がこれまでの既成概念を覆し、ある意味では現在は “ パラダイムの大転換期 ” にある。精神文化の過渡期、混迷期でもであろう。今大切なことは “ 新たなる時代に相応した倫理 ” をあわせて構築することではなく、人間における精神文化活動の活性化にあると考える。科学の時代と呼ばれながら科学が喪失した時代である。科学とは実証的自然哲学である。人間という動物がヒトと呼ぶことができるようになったのは7万年以上前のネアンデルタール人、3万5000年前のクロマニヨン人からである。彼らは宇宙に不思議さを抱き、生命に神秘さを覚えた。また、ヒトの死に涙し死者を初めて弔った。すなわち、“ 知(科学)と情(宗教)”を得たのである。このとき以来、ヒトがヒトと呼ばれるのである。表現として絵画と音楽の芸術活動も生まれ、文化文明が発生した。知と情のいずれかを欠くとヒトはヒトではないといえる。それは例え人間の姿をしていても他の生き物に等しい。すなわち「科学と宗教」は「人間が人間たる所以の固有な特質」なのである。今、わたしたちに問われていることは「人間が人間に帰る」ことあり、「人間が人間を捨てる」ことかも知れない。

科学も宗教も「人間が人間たる」ための精神活動であった。今の科学は科学ではなくテクノロジーのための科学に陥ってしまった。“ 役に立つ科学 ”、まるでマジックショー的なテクノロジーの開発に熱中する姿は嘗ての「錬金術」を彷彿とさせられる。子供に “ 科学離れ現象 ” が起きて久しい。これも自然の不思議さに関心が向けられず、技術の開発と利用だけに国家的誘導した結果であろう。経済のための科学に他ならない。バイオテクノロジーを活用した先端医療も宇宙開発もすべてコマーシャリズムが第一義的目的である。米国資本主義によるテクノロジーのコマーシャリズム化を目的としたサイエンスであり。サイエンスのコマーシャリズム化ではない。サイエンスがサイエンスでなくなったことに大きな問題がある。ある意味ではサイエンスという学問体系は変質し崩壊する危険性すら覚える。現に、現代のわたしたちの思考に論理性が重要視されない傾向がみられる。サイエンティスト自身が “ サイエンスとは何か？ ” を問わなければならない。それを問い続けることがサイエンスすることでもあろう。

同様に、“ 宗教とは何か？ ” と自分に尋ねる宗教家は幾か程にいるであろうか？ セントラ

ル・ドグマが変質してしまうとその宗教の存在意義なくなる。しかし閉鎖的自己完結的範疇から出ることなく社会の変化に無関心な宗教は自他救済を放棄した宗教と言えよう。現代が“科学とテクノロジーの時代”であることを拒絶するのではなく認める姿勢を持つことが宗教家に求められる。今の科学の善し悪しは別として、宗教家自身が科学に関心を持ち学ぶことが望まれる。“科学に学ぶ宗教”であることが現代の、次世代に受け入れられる宗教となるであろう。宗教自身が進展しなければならない。片意地な宗教も開教以来変わらない宗教はない。実際はすべて変化してきた。フレキシブルな宗教へと変革しなければ人間社会から遊離した一職業分野となるであろう。

5．結語

最初に帰ろう。“何故、いま倫理を採り挙げるのか？”“何故、宗教と倫理なのか？”そして“何故、科学者が呼ばれるか？”。それは科学テクノロジーの発展によって従来考えられなかった倫理的問題が発生しとことによる。その最も典型的な例が、分子生物学の進展によって生まれた高度バイオテクノロジーがもたらした生命操作に対する倫理問題である。特に先端医療技術の中でも臓器移植、クローン個体作成および再生医療によって生じる生命倫理に対して宗教はどのように対応すればよいかが大きな課題となった。この問題もある面では宗教の怠慢と言われても仕方ない。また何故に今に右往左往と慌てるのであろうか。そのような宗教の態度は外部からは滑稽にもまた頼りなくも見える。何故なら、生命とありかたを深く考えるのが宗教ではなかったのか？と言った人も多い。余りにも狭義的偏見的生命観に固執してはいなかったであろうか？科学者よりも先に生命のありかたを語らなければならない、答えなければならないのが宗教であったはずである。キリスト教、イスラム教、仏教、神道などと各宗派がそれぞれ異なる生命観を統一し、異なる倫理を設けるのであろうか？一般社会から見れば奇異に見える。すなわち各宗教のための生命観と倫理であってよいのであろうか？と疑問に思う。

倫理は個のものでなければならない。宗教、政治、教育などのシステムによって構築された人為的倫理は個の抹殺に繋がる。神も仏も一人の人間の命を救済するのであれば個を尊ぶ倫理でなければならない。それは個の内から自発的に生じる“知的な倫理”こそ真の倫理といえる。宗教はそのような倫理（観）が出芽し生育するための土壌であり、滋養とならなければならない。